摩周湖

摩周湖

義德

土筆社版

摩周湖　定価千円
昭和四十六年四月二十五日　第一刷発行

著者　八木義徳
発行人　吉倉伸
発行所　土筆社
東京都渋谷区代官山町十七番地二十三号
電話番号　東京461三六五八
振替口座　東京五四七六六
印刷所　合資会社　光明社
東京都港区赤坂九ノ六ノ四十三
©八木義徳　一九七一

検印
廃止

書籍コード　0093—0005—4816

目

次

雪の夜の記憶 7
網走刑務所 21
脱獄者 60
漁夫画家 88
摩周湖 121
倶多楽湖 151

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

海霧の町で 201
恵山岬 233
漁師の歩く道 266
あとがき 324
作品発表一覧 326

題字　更科源蔵

摩

周

湖

雪の夜の記憶

もう十数年も昔のことになるが、ＮＨＫからひとがきて、「故郷のひとびとへ年賀のあいさつを贈る」というローカル番組の録音を取っていったことがある。それは私などのような故郷を遠くはなれて永い年月の経った人間をそれぞれの地方から適当にえらんで、一月元日の朝、新年の祝詞と望郷のことばを全国一斉にそれぞれの地方支局から現地向けに放送したい、という趣旨のものであった。

私自身は、故郷である北海道のＭ市をはなれてもう三十年に近い人間である。本籍地も墓も東京に移してしまっている。そういう意味では、私はすでに「故郷喪失者」というべき人間であるかもしれない。だが故郷とは血のなかに存在するもので、役所に提出した一

片の紙きれや、冷たい墓石のなかに存在するものではあるまい。

私は眼の前におかれたマイクに向って、つぎのようなことを話した。

「ふるさとのお正月といえば、まずいちばん先になつかしく思い出すのは、あの買初めの二日の朝、新年の初荷を山のように積み上げ、色とりどりの旗や幟で美しい満艦飾を施した馬橇が十数台も一列につながりながら、まだ明けきらぬ静かな街の通り通りを、しゃらん、しゃらんと景気よく駈けぬけてゆくあの澄み透った鈴の音です。ふだんならば、母にうるさくいわれて、しぶしぶ暖かい寝床から這い出すわたしたち子供も、この朝ばかりはまだ暗いうちから眼をさまし、遠くからきこえてくる馬橇の鈴の音にじっと耳を澄ましながら、枕の下や、ふとんの下に大事に隠しておいたお年玉の袋を手で何度もたしかめては、『もう起きてもいいよ』という母の声のかかるのを、いまかいまかと待ちかねているあの胸のジンと痛くなるような期待のひととき……これが私たちの子供時代のお正月というものでした。あのなつかしい馬橇の鈴の音は、いまもなお古里のお正月の雪の朝を、しゃらん、しゃらんと景気よく走っているのでしょうか（後略）」

これが放送されてまもなく、私はM市の未知のひとから一通の手紙　うけとった。和紙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の巻紙に達者な毛筆で書かれた古風な文体の手紙である。

●日の朝の貴殿の放送をたいへん愉しく拝聴したが、小生もまた貴殿と同じく、正月といえば何よりもまずあの馬橇の鈴の音をなつかしく思い出す者の一人である。まことにあのさわやかに美しい馬橇の鈴の音こそは、雪国の正月には欠かすことのできぬ一篇の風物詩であった。だが、このせっかくの風物詩もとうの昔に喪われてしまったことを、貴殿にお知らせしなければならぬ。われわれにとって忘れがたいあの馬橇も、すでに時代遅れの古物と化して姿を消してしまったからである。それに第一、あの馬橇を走らすに足るだけの雪そのものが年を加えるにしたがって急速に少なくなってゆくようである。げんにここ数年、雪というものをほとんどまったく見ることのない正月がつづいているありさまであるが、あの純白の雪の道を凛々と冷気を裂いて勇ましく駈け抜けてゆく馬橇の代りに、いまは黒い地肌を醜くさらけ出したアスファルトの舗装路を、殺風景なトラックがやたら騒騒しく警笛を鳴らしながら、味も素ッ気もなく突ッ走ってゆくだけのお正月に成り下ってしまった。年を取るということは、おたがいにまことにさびしいことであるが、貴殿の一層の加餐と御健勝を祈り上げるしだいである、云々……

「ああ……」

と、私は思わずひとり言を洩らした。

「なるほど、こういうことになってしまったのか」

そして私は、すでに亡霊と化した時代遅れの記念物が、三十年後のこんにちもなお故郷の町を走っているかのごとく錯覚した迂濶な自分に失笑を禁じ得なかった。そういう私は、いよいよもって「故郷喪失者」というべき人間にちがいなかった。

ところで、それから一年置いた次の年、私はまた同じ趣旨の放送依頼をNHKから受けることになった。私は二年前の「錯覚」のことを話し、故郷の新年を語るべき唯一の手がかりがすでにこの世から姿を消してしまった以上、当方にはそれ以外に話すべき材料が一つもない旨をいって、一応辞退した。

「しかし、M市はいま北海道随一の工業都市としてスゴイ景気らしいですよ。ひとつ、その景気に因んで、新年のご挨拶もなにか景気のいいお話を……」

電話の声はいった。

「いや、景気のいい話といっても、どうも煙突のけむりの話では……」

いいかけて、思わず私は笑い声をあげた。電話の声も笑った。それから短かい押し問答が二、三あって、「そうですか、それじゃやむをえません。どなたか別の方にお願いすることにしましょう」と電話は切れた。

それから十数年、その間私は幾度か北海道への旅をしたが（そこを離れて三十年にもなる人間にとっては、すでに〝帰郷〟とはいえず、〝旅〟といわなくてはなるまい）、冬の季節のM市へはまだ一度も訪ねたことはない。

ふるさとは遠きにありて思うもの、と或るすぐれた詩人は歌ったが、年々雪が乏しくなるというわがふるさとは、私にとってはいよいよ遠いものになってゆくようである。そうしてわがふるさとにもし一片の雪も降らなくなったならば、そのときこそ私は完全な「故郷喪失者」になることであろう。

私の雪に関する思い出のなかで、もっとも遠くはるかなものは、幼児のころ、雪に溺れてあやうく死にかかったときの記憶である。

あれはたぶん私が数え年で五つか六つのころだったと思う。大晦日の雪の降りしきる

夜、私は家を飛び出したのだ。なぜ飛び出したのか、原因はしかと思い出せない。おそらく、例のごとく何かのいたずらがみつかって、例のごとく祖母のお仕置きで納戸に閉じこめられ、そこから脱出を図ったのにちがいない。

そうだ、大晦日の夜といえば、北海道の人間にとっては一年のうちでいちばんたくさんごちそうの出る日だ。たぶん私は食卓にずらり並んだそのごちそうが待ちきれず、大好物の栗きんとんか何かを指でなすり取ってペロリとなめたところを、うっかり祖母にみつかったのにちがいない。わが家では、子供たちの躾は母ではなく、もっぱら祖母の役であった。士族の出であることを唯一の誇りとしているこの祖母の、孫どもにたいする躾は厳格であった。われわれのいたずらがすこし度を越すと、祖母が片時もそばから離さぬ愛用の長煙管が眼にもとまらぬ早さで飛んできて、われわれの肩口や膝を容赦なくピシリと打ち据えるのだ。それは、思わず飛び上るほどの痛さであった。この祖母のわれわれにたいするもっとも重い刑罰は、われわれを奥の間の薄暗い納戸に閉じこめて鍵をかけ、素直に謝罪するまでは食事をあたえぬことであった。一つ年上の兄と二つ下の弟とは、この罰を食らうとすぐさま「ごめんなさい」と降参して納戸から出され、いそいそと茶の間へ飛んで

ゆくのだが、私だけはどうしてもこの「ごめんなさい」という言葉が素直に口から出ず、そのためにいつまでも暗闇のなかで埃り臭いにおいを吸っていなければならなかった。しかし結局は、何時間か経って母が身代りに謝ってくれ、しぶしぶ納戸から引き出されるのだが、そのとき「この強情者！」といってきつく私をねめ据える祖母の眼には、明らかに憎悪の色があった。だから兄弟三人のうち、もっともひんぱんにこの「納戸入り」の罰を食らうのは私で、どうやら私はこの祖母にはあまり愛されぬ孫であったらしい。しかし現在の私は、この祖母の「お仕置き」をなつかしいものとして思い出すことができる。

だが、これは後年のことだ。話をもどそう。

私は家を飛び出した。（もしそのとき、私が「納戸入り」をしていたとしても、その老朽した挿し込み錠はすこし上手に板戸をゆすると簡単にはずれることを、私はたびたびの経験で知っていた）

家を飛び出して、私は一体どこへ行くつもりだったのか？　私は乳母の家へ行くつもりだった。いや、私の脚が本能的に乳母の家の方に向って動き出したという方が、この場合はおそらく正しいだろう。そのときの私にとって、もし行くべき家があるとすればそれは

乳母の家以外にはなかったはずだからである。

私は生まれてまもなく母の乳の出が止まったために里子に出され、三歳の年まで乳母の家で育った。この乳母は港の沖仲仕の小頭の女房で、牛のように巨きな乳房をもった、気のいい女だった。亭主の方は、坊主頭のガッシリした躰つきの男で、ふだんはひどく無口だが、すこし酒が入るとたちまちニコニコと相好を崩し、三人の男の子をいっぺんに大きな膝の間に抱えこんでは、ほゥら、ほゥらと、飽きるまで揺すってくれるのだった。

私はこの乳母夫婦に愛された。すくなくとも私の人生において、他者から愛されたという意識を無条件にもつことのできるいちばん最初の対象は、この単純で善良な乳母夫婦であったといっていい。貧しい沖仲仕の家では、子供のための玩具らしいものは何一つなかったから、われわれの遊び場はもっぱら裏山の雑木林の中であった。われわれはそこで木登りをしたり、ブランコをしたり、ぶどうの蔓につかまってターザンみたいに空中飛行を演じたり、山ぶどうやこくわを採って食べたり、竹の子ほりやキノコ探しをしたり、いよいよ腹が空けば、落葉や枯枝をあつめて火をつけ、家からもってきたダシこんぶやスルメやジャガイモなどを焼いて食べるのだった。その裏山で小一日あそんで家に帰ってくると

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com